

女子大学生の低用量ピルに関する認識と認識に関連する要因

田中由舞、塚本康子、佐藤郁美、若月亜希子
新潟医療福祉大学 看護学科

【背景・目的】低用量ピル (oral contraceptives: 以下「ピル」とする) は、より確実な避妊により人工妊娠中絶を減らすだけでなく、月経周期の調節、月経苦痛や月経量の減少、更にニキビの予防効果などの副効用があり、ピルを用いることによって、女性は自分の意思で避妊や月経に関連する体の不調をコントロールすることができるようになる。低用量ピルが女性にもたらすメリットはさまざまにあるが、我が国におけるピルの普及率は一般女性で約3%であり¹⁾、他の先進諸国 (ドイツ 58.6%、フランス 35.6%、アメリカ合衆国 15.6%)²⁾と比較しても極めて低い。なぜピルはわが国の女性たちに受け入れられないのか、女性が自己の健康管理に目を向け始める女子大学生に焦点を当て、ピルに対する認識と認識に関連する要因について明らかにしたいと考えた。

【方法】(1)対象者:新潟医療福祉大学に在学する4年生の女子大学生約500人 (2)調査期間:2019年7月22日~8月9日 (3)調査方法:Web上での選択式アンケート調査 (4)調査内容:所属学科、ピルの印象、ピルの知識、ピルに関する情報源、月経による不調の有無 (5)分析方法:記述集計及び差の検定 (6)倫理的配慮:日本看護協会倫理規定、新潟医療福祉大学倫理委員会規定に準拠したデザインで行った。本研究は新潟医療福祉大学倫理委員会の承認を受け、関連する利益相反はない。

【結果】回答数152名、回答率30.4%。学科別では看護学科35.5%、次いで健康栄養学科が12.5%であった。

(1)ピルについて聞いたことがあるかについて、「ある」97.4%、「ない」2.6%であった。

(2)ピルの使用については、「今使っている」8.2%、「今までに使ったことがある」13.6%、「使ったことはない」78.2%であった。

(3)ピルについての印象は複数回答可で、「あまりいい印象はない」21.6%、「使いたいと思わない」17.6%、「できれば使いたい」20.9%であった。その他、「副作用が心配である」38.5%、「経済的に負担がある」35.8%、「産婦人科を受診することに抵抗がある」31.1%、「簡単に手に入らない」20.9%であった。

(4)ピルに関する知識を問う設問では、効果についての正答は、「避妊の手段になる」86.5%、「月経周期をコントロールできる」75.7%、「月経前症候群(PMS)が改善される」53.4%、「経血量が少なくなる」23%であった (図1)。

また、「医師からの処方が必要」88.4%、1シート2500~3000円かかる」46.3%、「血栓症のリスクがある」54.6%、「子宮頸がん・乳がんになるリスクは増加するが、卵巣がん・子宮体がんのリスクは減少」は25.4%の正答率であった。一方、誤った知識として、「内服をやめた後、妊娠しにくい体質になる」26.2%、

「太りやすい体質になる」26.9%であった (図2)。

(6)ピルの情報源は、「インターネットやテレビ」50%で最も多く、次いで「親や友人」39.2%、「高校の授業」31.8%であった。

(7)月経に対しての不調の有無については、「ある」74.8%、「ない」25.2%であった。

図1 ピルに関する知識1

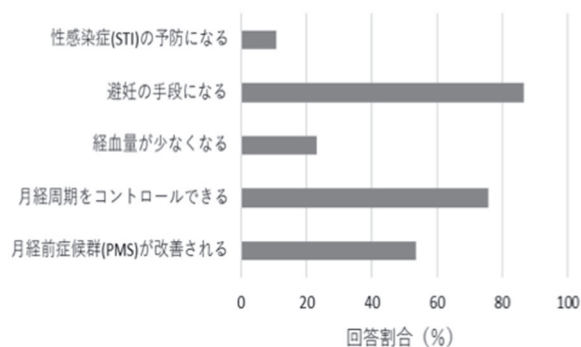
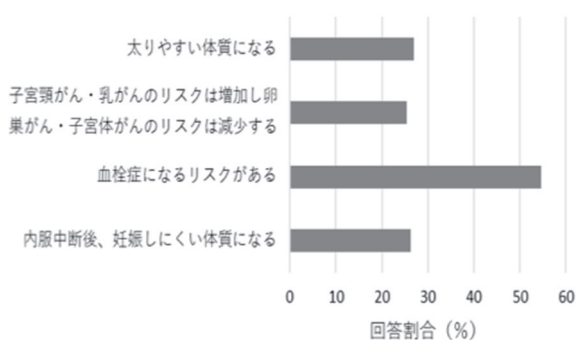


図2 ピルに関する知識2



【考察】今回の対象において、ピルの使用率は21.8%と一般女性の普及率と比べ高い結果となったが、全体の7割以上が月経の不調があると答えた現状からすると、使用率はそこまで高いとは言えない。ピルの使用率が低い理由として、ピルについての印象は副作用や経済的負担などマイナスのイメージが上位を占めていることと、ピルに関する正しい知識が乏しいことが関連していると考えられた。

【結論】女子大学生におけるピルへの関心は高い傾向にあるが、正しい知識を身につけている者は少ない。いつ、どのように情報提供するかが重要であり、対象に合わせた情報源の提示を行う社会全体の取り組みが必要である。

【文献】

- 1) 能瀬さやか, 土肥美智子, 難波聡, 秋守恵子, 目崎登, 小松裕, 赤間高雄, 川原貴 (2014): 女性トップアスリーートの低用量ピル使用率とこれからの課題, 日本臨床スポーツ医学会誌, 22(1), 122-127.
- 2) 木村好秀, 斎藤益子 (2017): 家族計画指導の実際 第2版 少子社会における家族形成への支援, 医学書院